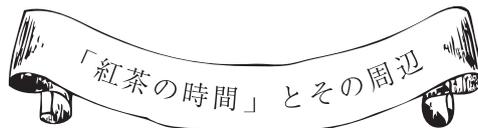


きもちは、 言葉を さがしている



第 51 話

水野 スウ

スウすごろく

年に一度、心の病気を体験した方たちの働いている東京調布のレストラン、クッキングハウスへお話に行きます。代表の松浦幸子さんから「スウさんのピースウォーク」の通しタイトルでその年々のお話をいただければ、私なりの平和の歩き方を語って今年で19年です。

今回のご注文は、「紅茶の時間」の原点。となれば、その中身はビフォーア—紅茶の私ともおおいに関係のあることで。そもそも、今こうして在る私は、どうなってこうなって現在の私になったのだろう。私の成分はいったい何でできているのだろう。それを考えるのって、「私」の当事者研究かも。そう思ったら楽しくなってきて、私のオギャー！から始まる「スウすごろく」をつくり、当日はその年表みたいな紙をみなさんにお配りしてから話しはじめました。

マガジン連載のサブタイトルは、「紅茶の時間とその周辺」だけど、今号は、紅茶の時間以前の私もふりかえりながら、スウすごろくの中身と、すごろくをつくってみてわかったことなどを。

憲法とおない年

私が誕生したのは日本国憲法が公布された日と施行された日の間、1947年の1月、つまり憲法と私はおない年です。父が53歳、母が36歳の時の子どもでした。当時の初産年齢からすれば母はかなり遅めでしたが、母との年齢差を感じたことはなく。明るくておもしろい母は、私にとって太陽みたいな存在でした。

そんな母が中2の時に病気で亡くなり、その半年後、年の離れた兄を突然、自死で亡くしました。そうして始まった、68歳の父と32歳の義姉と15の私、遺された者同士のぎこちない3人暮らし。家族で兄の死について話すことは一切ありませんでした。父も姉も自分を責めていることが私にもよく伝わってきたので、暗黙のうちにそうなる。兄の死についても、こんなぎこちない家族のことも、同級生たちには言えないまま、私はふつうの顔して学校に行き、内にも外にも吐き出せないグチャグチャの気持ちは文字にしていつも紙にぶつけていました。

銀座月光荘画材店

高一の時、絵の好きな友人が連れて行ってくれた銀座の月光荘画材店。銀座にあるお店なのに澄ましてなくて、そこだけがらくた箱のようで、自由な居心地。その店主で、父と偶然同い年の月光荘おじちゃんに出逢えたことは、私の人生にとって大きな意味ある出来事でした。

スケッチブックを買いによく通うようになったある日のこと、おじちゃんが私をじっと見ながらほとほと感心した口調で言ったのです。「スウヤ、お前さんは、おもしろいなあ〜!」。それまで周りから「水野さんって変わってるね」とよく言われていた私にとって、その言葉はめっちゃくちゃうれしかった。人と同じでないところ、少し違う感じ方をすると、その感性を、おじちゃんは両手広げておもしろい、と言ってくれた。私をまるごとで認めてくれた、そんなふう感じられて。

以来、月光荘は私の居場所となり、そのスケッチブックが日記帳がわり、私の心の吸い取り紙になりました。その日から半世紀以上たった今でも、おじちゃんのあの時の言葉は私の胸に灯るあかりです。

そのうち月光荘のノートには、グチャグチャのきもちだけじゃなく、ふっと心に浮かんできた詩も綴るようになっていきました。大学生の時、バイトして貯めたお金で、そうやって書きためた詩の原稿を自分で印刷所に持っていき、『☆のおしゃべり』という青い表紙の手づくり詩集を出しました。

できたての詩集を月光荘おじちゃんに見せると「もっと持ってこい、店で売ってやるよ」。その言葉通り、小さな詩集は月光荘おじちゃんの応援もあって、銀座からいろんな人のところへ飛んでいきました。その20年後からずっと産直本をつくるようになった私だけど、原点はここだったかとあらためて気づきます。

アメリカへ

詩集を出してしばらくした頃、以前から時どき聴いていた永六輔さんのTBSラジオ番組「誰かとどこかで」に1リスナーとしてはじめて手紙を出しま

した。明治生まれの父がいかにわからんじんであるか、娘の私のことをちっとも理解してくれない、的な、いわば父への愚痴を書き綴ったような内容の手紙。なんとその手紙が番組内で読まれて、そればかりか、手紙と一緒に送った例の詩集がきっかけで、その番組内で放送される詩を書くようになりました。

ところがその1年後に突然、仕事を辞めて結婚してアメリカに飛んで行ってしまった私。その頃付き合っていた人がアメリカへ行くことになり、彼と結婚して二人でアメリカで暮らすことを決めたのです。だけどその生活はうまくいきませんでした。

つきあいはじめてすぐに紹介された彼の家族のにぎやかさ、明るさ、オープンさ。自分の家族にないものがここにあると思えて、家族中で私を受け入れてくれたうれしさに私は舞い上がってもいたのでしょう。結婚相手は彼という個人なのに、私はどこか勘違いしてしまっていた。アメリカで実際に2人で暮らしてみても、お互いの合わなさにどんどん気づいていきました。このまま一緒に生きていくのは無理だと、私だけでなく彼にもわかったのは本当に幸いなことだったと思います。

何をしたいの？

その彼と別れ、3年後の1973年に日本に戻ってきた時、なんとしても仕事しなきゃと思ったものの、考えつくところはTBSしかなく、赤坂にある局を帰国早々に訪ねました。スタジオで再会した永さんに、結婚に失敗したことを伝えるのは相当に恥ずかしかった。けれども、番組の中で「何をしたいの？」と永さんに訊かれた時、「書きたいです!」と瞬時に答えた私は、まったく若さゆえの怖いもの知らず。今思い出しても冷や汗が出ます。

向こう見ずな私の言葉を受けとめてくれたのが、この番組のディレクターの橋本さん。出版社で編集を担当している松田さんを紹介してくれて、それから私は毎日、書きたかったことを原稿用紙に綴りました。そうして私のはじめての単行本として出版されたのが『セントラルパークの詩』。ホンダ350というバイクのお尻に乗っけてもらってニューヨークからカリフォルニアまでを3週間かけて大陸横断した物語。以来、松田さんとは7冊の本を一緒につくり、

親しいおつきあいが今も続いていて、彼はこの日のクッキングハウスお話会にも参加しています。

帰国するなり会いに行ったTBSの橋本さんから同時に、電通の人も紹介してもらいました。おかげで、別の局の深夜のラジオ番組でコマーシャルを兼ねた詩を書くことになったのですが、電通の人との初対面の場面、今もよく思い出します。

私のことを「こちら、コピーライターの水野スウさん」と紹介する橋本さん。当時の私はコピーライターという単語なんて聞いたこともなくて、え？何それ？って一瞬頭の中では固まった。だけどここで聞き返しちゃさすがにまずいと、何くわぬ顔して、内心ドキドキしながら会話を続けて、なんとか仕事をもらうことができたのでした。

50年前の私のドキドキ、今回のクッキングハウスのお話会に参加した橋本さん、この日はじめて知ったはずです。

金沢へ

学生時代につきあっていただけお別れしてずっと離れていた彼と、日本に帰って再会しました。私の結婚の失敗も知った上での出逢い直し。一緒にいて、まったく等身大の私でいられると感じたことは何にもまさる安心でした。帰国した翌年、彼と結婚して、彼の生まれ故郷の金沢に移り住み、今年で49年になります。

知らない北陸の町での初めての暮らし。私には見るもの聞くものすべてがおもしろくて、その発見を、連載していた雑誌や金沢のタウン誌や地元の新聞に書くことに夢中になりました。金沢の人にしたらとうに知っていて当たり前のことごとを、東京から来たえんじょもん（遠い所のひと、と書く言葉で、地元のひとつでないという意味の金沢弁）の私が発見して、おもしろいと感じて、書く。それをまたおもしろいと思う人も少なからずしてくれたのでしょう。それらの連載が回数を重ねるごと、ありがたいことに松田さんの編集で出版社から何冊かの単行本になっていきました。電通のコマーシャルの仕事も続けていて、NHK金沢放送局のリポーターをすることも何度か。

紅茶の時間のはじまり

結婚して3年目の頃だったろうか、産婦人科で診てもらったところ、卵管が閉じているので妊娠は難しいかも、と告げられたのです。そのこともあったのでしょうか。いっそう書くこと、取材することに打ち込んでいたら、思いがけず結婚から8年半目の1982年、娘が生まれてきてくれました。

産んでから気づいた、ありゃ、私には子育て仲間が一人もいない。仕事ばかりしてきて、友人と知り合いはいっぱいいいたけど、いのちと一緒に育てあう仲間と呼べる人がいなかった。はて、そんな仲間と出会うにはどうしたらいいだろう。

ちょうどそんな時、前から私の本を読んでくれていたという金沢のある人から声をかけられました。「うちで家庭文庫をしているの、そこにお話にきてくれませんか。文庫のお母さんたちにスウさんの子育ての話をしてほしい」。

家庭文庫。初耳の言葉でした。自宅を毎週決まった曜日に2時間ほど開放して、地域の子どもたちに絵本を貸し出したり、文庫のお母さんが子どもたちに絵本を読んだり、おはなしを語ったりする、いわば私設ミニミニ図書館のようなところのこと。その一つに呼ばれたのでした。

その文庫にお話に行くと、ほかの場所で文庫をしている何人かのお母さんたちとも知り合うことができました。そして、娘を抱いていくつかの家庭文庫をハシゴしてみても思ったのです。週に一度の決まった時間、自分の住む場所が地域にひらかれた小さな公共空間になるっていいな、自分ちをそんなふうにひらいたら、仲間と呼べる人たちもおそらく出逢えるんじゃないだろうか。

私を呼んでくれた文庫のお母さんに「絵本がないからうちで文庫はひらけないけど、週に一回、誰でも来れるオープンハウスをはじめ、っていうのはどうだろう」と相談すると、「大賛成！文庫に来てお母さんたちの中にも行きたい人、きっといると思う」。そんな言葉にも背中を押されて、最初は「赤ちゃん連れのひと誰でもどうぞ、お互いの胸のうち話しませんか」という呼びかけで、週1の午後、家

をひらいてはじめてのが「紅茶の時間」です。娘はまだ0歳でした。

コピーしたはがきサイズのお知らせを金沢のいくつかの文庫に置かせてもらう、というだけの宣伝。それでも口コミで徐々に紅茶という場所が知られていき、私たち一家の暮らす金沢城近くの小さなマンションは、それからの数年間、毎週毎週、赤ちゃんや小さなひと、お母さんたちの集まる週1未満児保育園さながらのにぎわいでした。母たちは、赤ちゃんにおっぱいあげながら、おしめ替えながら、膝に子どもを抱っこしながら、時に子どもにぐずられながら、子育ての悩みや家庭内のこと、自分のこと、うれしい、悲しい、しんどい思い、などなどもう夢中で、実によくよくしゃべりあいましたとも。

若いママたちとひと回りは年の違う私も、その一人。話す、は、放す、なんだ。胸のうちにあるモヤモヤもザワザワも、思いは誰かに話すことで放していかないと心が便秘する。そのことを、私自身が回を重ねるごとに体で学んでいく毎週の紅茶でした。

多目的空間紅茶

そのうち、いつもの紅茶を「ふつう紅茶」、ゲストをお呼びしたり上映会をする時は「とくべつ紅茶」とよぶようになり、わがやの生活空間が、毎週水曜日には異次元の多目的空間となりました。おさな子たちのためのクリスマスおはなし会もすれば、紅茶遠足もする。すてきな保育をしている保育園、幼稚園の園長先生をお呼びしてお話を聞く。講演会で知り合った絵本作家のまついのりこさんのお話をひらく。さくらんぼ保育園の実践を映画にした「さくらんぼ坊や」全6回の上映会を2年かけてする。

せまいマンションの和室とリビング合わせてたった20畳の空間。特別紅茶も含めて、そのすべてに親も子どもも一緒に参加する。毎回大人より小さい子のほうが多い空間で、泣いたりぐずったり、時にしっちゃんかめっちゃか。今ふりかえると、そんな状態でよくまあ、こんなにもいろんなことができたものだ后感心します。

紅茶の時間でとりくんだもっとも大きなとくべつ

紅茶は、デパートの催事場を会場に星野富弘さんの「花の詩画展」を開催したこと。実行委員会の場所も紅茶なら、詩画展会期中は紅茶が保育室になって、仲間たちが代わりばんこで保母さんをし（実際、仲間の中には元幼稚園、保育園に勤めていた人たちが何人もいて）、会場係のお母さんは子どもを紅茶にあずけてからデパートに行く、という一週間。娘も毎日、紅茶保育室のお世話になりました。

紅茶の外の人たちの協力もたくさんあったことだったけど、詩画展にはたくさんの人が足を運んでくれて、それぞれにおさなご抱えてた当時の紅茶仲間にとって、それは大きな自信になりました。

社会とつながる

子育て仲間とつながるために始めた紅茶だったけど、紅茶は社会ともつながる場所。そう意識するようになったのはチェルノブイリ原発事故がきっかけ、とずっと記憶していたけど、スウズごろくをつくりながら、その前に「国家秘密法に反対する女性の会・金沢」を弁護士さんとたちあげていたことを思い出しました。

国家秘密法は別名、スパイ防止法。かつての治安維持法によく似た法案が国会に出されるかもしれないと知り、なんとなく嫌だな、という違和感があった、同じマンションの下の階で事務所を開いているママ友弁護士さんのところへ、詳しいことを聞きにいったのです。聞いたら違和感が危機感に変わり。「そんなあぶない法案が出されているんだ。でもそのこと皆まだ知らないかも。ぜひこのお話を紅茶でしてほしい」と頼んで、すぐにとくべつ紅茶をひらきました。そして、危機感を共有したその弁護士さんと紅茶仲間とで「女性の会・金沢」を1987年につくり、金沢市内の広い会場で200人が参加する会を3回も開いたのでした。全国各地の弁護士会でも、同様の主旨で反対する会が次々つくられていた頃です。

今考えても、小さな市民グループの集まりに毎回どうしてそれほど多くの人が参加したのか、不思議です。想像するに、40年近く前は「ちあにいじほう」という言葉に肌感覚で反応する人がそれだけ多かったということかもしれません。戦前にあったその悪

法が人々の内心をどれだけ縛っていたか、怯えさせてものを言わなくさせていたか、身を持って知っている人たちがまだまだ健在でした。過去の戦争が今ほどには遠くない時代だったのです。

その法案を推進していたのが自民党、それを後押ししていたのは統一教会の政治部門である国際勝共連合でした。当時の法案は廃案となり法律にはならなかったけど、その後の安倍政権で姿や名前をかえ、似た中身の法律ができてしまっています。特定秘密保護法であったり、共謀罪法であったり、重要土地利用規制法であったり、と。

いのみら通信

1986年に起きたチェルノブイリ原発事故のあと1年ぐらいすると、紅茶でも原発に対する不安をお母さんたちがよく口にするようになりました。私もすごく不安なきもちがあり。詳しい人呼んで勉強会をしたり、講演会で聞いてきたことをふつう紅茶でおすそわけしたり、わかりやすい原発関連の本を取り寄せては紅茶の玄関で売ったりするようになりました。

そうやって見聞きし知ったことを他の人にも伝えたい、と思うのが私の身上なんでしょう。新聞やテレビで報じないこと、とりわけ保守的な地元紙が書かない原発のことを、金沢のタウン誌、毎日新聞の月いち別刷り「女のしんぶん」に、よく書いていました。そんな私に「損するよ」と忠告してくれる人もいて、実際、地元紙からはすっかりお声がかからなくなったけど、そういうことって昔も今も、私はあまり気にしないちみたい。

1988年からは原発を知らせるための「いのちの未来に原発はいらない通信」、通称いのみら通信を手書きで出し始めました。

産直本『まわれ、かざぐるま』

いま思い返してもどこでその人と知りあったかわからないのだけど、ある出版社の社長さんが、雑誌か新聞に載った私の文章を読んで興味を持ち、本を出しましょう、と連絡してきました。

私がそれまで書いてきたのは、娘が生まれてからのこと、紅茶の時間のこと、仲間たちと原発を学び、

原発はいらないという意思表示の一つでかざぐるまフレンドシップキルトを仲間と縫い始めたこと、キルトの型紙をいのみら通信の付録にしたら全国で同じキルトが次つぎ縫われていき、針と糸を動かしながら原発の話をしあう場が全国に生まれていったこと、などなど。子育て、自分育て、それと地続きの脱原発の話でした。

ところが、書きためた原稿をその社長さんに送り続けていたある日、いきなりこう言われたのです。「原発の本なら、もっと派手なことしなきゃ売れねえ」。は?! 目が点になると同時に、怒り沸騰。こんな下品なこと言う“おっさん”に、私といとしい娘と仲間たちとの大切な物語をゆだねてたまるか! 直感的にそう思って、これまで渡していた原稿をすぐに、すべて奪い返しました。

チェルノブイリ原発事故から数年たって、街の本屋さんには原発関連の本がいっぱい並んでいる頃でした。それが当時の売れ筋、トレンドだったんでしょう。だけど私が伝えたいのは、原発のことだけじゃなかったんです。娘が生まれていのちと向き合うために始めた紅茶の時間。そういうときに原発事故が起き、仲間と学んだら、原発はいのちと共存できないことがわかった。そのことを伝えたいのであって、派手で目立つ“反原発運動”について書きたいわけじゃなかったんです。

さてこの原稿、どうしたら本にできるだろう。これまでほとんど出版社を通してしか本をつくったことがなかったけど、不思議と不安はありませんでした。紅茶仲間の何人かが、自費出版したい人のための、女性だけの小さな出版社を手伝っていることは前から知ってました。よし、それなら編集はそこに頼もう。星野富弘さんを私に紹介してくれた人は金沢の印刷会社の社長さんでした。よし、それなら印刷はそこに頼もう。預金通帳に、本づくりにかかる実費のお金はありました。うん、これで本がつくれる。

出版社の代表をする人から、「スウさん、うちは出版のお手伝いはするけど、営業はしてないのよ」と言われたけど、それも承知。いのみら通信の読者は当時1000人、この本に興味をもって読みたいと思

う人はきつというはず、と迷わず産直本つくることを決めました。この、論理によらず根拠もないけど、直感アンテナで行動しちゃう、というところが実に、私の私たるどころだなあと思います。

そうやって1990年に生まれた『まわれ、かざぐるま』の本は、顔の見える人の手から手へ、いのみらでつながっている全国の人へと、本当に羽がはえたように飛んでいきました。中には1人で100冊注文したつわものもいて。この人は友人の出産祝いにこの本をよく贈ったそうです。子育ての本と思って読み始めたら、紅茶の時間を知り、原発を知り、本を読み終わる頃には脱原発になってる、そういう下心でプレゼントしてたの、と笑いながら後のち彼女が教えてくれました。

原発のお話出前の会場でも、多くの人が本を買ってくれました。いのみらという自前のメディアと自前の産直本を持つてることの強みを、たびたび実感したものです。あの時、もう自分で本をつくるっきゃないと思い切らせてくれたあの“おっさん”の一言に、今ではむしろ感謝してるほど。

いのみらは今も出し続け、現在116号になります。途中から、原発に限らず社会で気になるさまざまを綴るようになって、その中には、HIV/AIDSも差別も性の問題も人権も憲法も。現在、定期購読の人は500人ほど。不定期で年に2回ほど発行されるいのみらは、今では「いのみら通信」と呼びたいくらいスローな、私から読者さんへのラブレターです。

津幡町へ

金沢の中心部から隣の小さな町、津幡に家を建てて越したのは1992年。車で金沢駅から30分、電車だと1時間に1本のローカル線に乗って最寄駅から徒歩10分余り。団地の端っこに建つ煙突のある木の家は、部屋数の少ない分、空間と窓を広くしました。そういう間取りを提案したのは夫。開放感のある暮らしを彼が望んだこともあるけど、「紅茶、続けるだろ、なら広い方がいろんなことできる」と言われた時は胸が熱くなりました。紅茶の時間があい

ているのは平日の午後なので、会社勤めの夫がその場にいたことは一度もないけど、私の話から、本から、紅茶という場を彼がそんなふうに理解し、認めてくれていたことが本当にうれしく、ありがたかったです。

ちなみに、四方の窓を大きくとって風の通り道を確保し、薪ストーブを置いたエアコンなしの家づくりは、夫婦で設計士さんに提案しました。少しでも電気に頼らない生活がしたくて。庭に植えた木々が次々に育っていき、風と緑の自然エアコンのおかげで、夏でも扇風機だけで過ごすことができます。(だけど年々夏の暑さが厳しくなっているの、これ以上暑くなるとうなるかなあ……)

さて、津幡に移った紅茶には、以前から紅茶に来ていた人、津幡の紅茶になって初めて来る人とがまざりあいましたが、紅茶初期の、子育て真っ最中ママと赤ちゃんたちでごちゃまぜのにぎやかさはとうになく。金沢から遠くなったこともあって、紅茶はだんだんとはやらない場所になっていきました。

すると来る人の顔ぶれも少しずつかわります。胸のうちに重いものを抱えた人、しんどい人、不登校やひきこもりの若者、そういう息子、娘さんを持つ親御さん、といった人たちが、人数は多くないものの割合的に多くなっていったのです。はやらない紅茶はその分ゆっくり話ができ、そんな人たちにとって少しは安心できる場に思えたのかもしれない。

でも逆に、その頃の私はとても不安でした。重たい話、深刻な悩みを打ち明けられても、それをどうきいたらいいかわからない。私の言葉で目の前の人を傷つけてしまったらどうしよう……。こんな不安をどうにかしたくて、その頃から私は少しずつ、聴くこと、受けとめることを、我流で学びはじめるようになりました。

クッキングハウスへ

クッキングハウスの松浦幸子さんを知ったのは、21世紀になる直前。私なりの必要に迫られて独学しはじめて数年たち、学んだことを紅茶で実践してはまた学ぶ、そんな試行錯誤を繰り返しているうちに、だんだんしんどい人と向き合うことが不安でな

くなってきた時期でした。

ある日届いた、紅茶とつながりのある、不登校を考える富山のお母さんたち主催の講演会のチラシ。そこに書いてあった松浦さんの名前もクッキングハウスも初耳、でもこのお母さんたちがお招きする人なら、となんだか気になって出かけていったのです。

お話を聴きながら、不思議だけど紅茶との共通点をいっぱい感じました。クッキングハウスは平日に毎日開く、心の病気の人たちの働いているレストラン。紅茶は週一午後だけ開く無料のカフェみたいな場所。規模もスタイルも全然違うから、並べるなんておこがましい。だけど、一人ひとりのきもちを受け止める、まっすぐに聴く、それをとても大切にしながら松浦さんがクッキングハウスをしていること、紅茶で私が大切にしたいと願ってしていることはあい通じている、と勝手に思ったのです。

会場で売られていた松浦さんの著書『クッキングハウスからこんにちは』を買って帰り、一晩で読む。うん、やっぱり通じる、と確信して翌日、出版社に電話、40冊注文。『まわれ、かざぐるま』を100冊注文した人と私、50歩100歩ですけど、その時の私には、この本を必要とする人が紅茶にはいっぱいいる、と思えたのです。

その翌月、東京のクッキングハウスを訪ねました。その頃には紅茶の玄関本屋で平積みしていた松浦さんの本は、ほぼ完売。SNSもない時代、紅茶に来た人たちに個別に、これ、いい本だよ～、って熱心に勧めながら私、クッキングハウスの話もいっぱいしてたんでしょうね。

それからの数年間、私は夜行列車でよくクッキングハウスに通いました。クッキングハウスにはレストランだけでなく、ランチタイムの前後に、メンタルヘルスを学ぶ会、コミュニケーションを練習するSST、サイコドラマ、などなど、メンバーさんと一緒に市民も参加できる学習プログラムがさまざまあります。そのどれもがその頃の紅茶の時間と私にとって必須の学びに思えて。そこで学んだことを翌週の紅茶で会えた仲間たちにその都度、少しずつおすそわけしました。

2004年に『きもちは、言葉をさがしている～20年目の紅茶の時間』という本を、松田さんに編集をお願いして出しました。紅茶の話、家族の話が中心の書き下ろしエッセイ集ですが、今まで一度も触れずに来た兄の自死のこと、私が育った水野の家のこと、義姉と本当の家族になっていったことなど、はじめて文章にした本でもあります。

それができたのは、紅茶の場が育って、聴くことには静かな力があると確信できるようになったのに加えて、松浦さんはじめクッキングハウスのメンバーさんたちと出会えたことも大きかった。内に抱え込んだものを話そう、書くことで手放そう、と思えたのはクッキングハウスから受けとった勇気のおかげです。

松浦さんはこの本のことを「精神保健分野の人たちに読んでほしい本ね、専門家がむずかしく書くところを、スウさんが市民の言葉でわかりやすくやさしく書いてくれている」と言ってくれました。そんな意識はかけらもなかったけど、結果的にそうなら本当にうれしいことです。

クッキングハウスでおはなし会

この本を出した年、松浦さんからリクエストをいただいて、私はクッキングハウスのメンバーさんやお客様たちの前ではじめて語りました。その時のテーマは本と同じ、『きもちは、言葉をさがしている』（あ、このマガジンの連載とも同じタイトルですね。実はこの本のタイトルからとったのでした）。それ以後毎年一回、「スウさんのピースウォーク」と題してみなさんの前でお話させてもらうようになって今に至ります。

今年のお題は、「紅茶の時間」の原点。ということで、今回のお話会のために用意したスウすごろくの右ページには、松浦さんのご注文に添って語った「ピースウォーク」のテーマが順に記してあります。どんなことを語ってきたのか、2回目以降の一覧を見てみると――。

2005年「憲法の主語は誰？」

それは私たち。加えて、ベアテさんの贈りものことも。

2006年「9条のいいところを見つけ」

元ベトナム戦争帰還兵アレンネルソンさんの語る9条のことも。

2007年 おやすみ

2008年「スウさんのピースウォーク人生」

私の心の旅。がんばりすぎて心が迷子になった、前年の私のことを、弱さの情報公開。

2009年「ほめ言葉のシャワーから平和へ」

前年に娘とつくった冊子『ほめ言葉のシャワー』。そこから平和につながる話を親子で語って、とのご注文。それに応えようと憲法を読んだ娘が、13条を新解釈。「わたしは、ほかの誰ともとりかえがきかない」ではじまる13条やさしい日本語訳をつくった。

2010年「ほめ言葉は認め言葉」

ある方から「ほめておだてる本をください」と言われた時の違和感から、ほめるって、認めるって、どういうことだろうと改めて。

2011年「いのみら通信の由来」

3.11原発事故が起きた年のご注文。「いのちの未来に原発はいらない通信」を出し始めたわけを語る。

2012年「私の心の居場所の原点」

居場所ってなんだろう。月光荘おじちゃんのこと。

2013年「コミュニケーションを巡る物語」

前年に出した本『紅茶なきもち』のこと、クッキングハウスに通って学んできたコミュニケーションのことなど。

2014年「13条のうた ほかの誰とも」

2009年に娘がクッキングハウスで語ったことから、娘流の13条わたし語訳が生まれ、それをもとに13条のうたをつくったこと。

2015年「私の12条宣言」

ふだんの努力の12条のこと。憲法のおはなし出前で全国に行くようになった私、この年、初の憲法本『わたしとあなたのけんぼうBOOK』を出す。

2016年「私の1票は大きな、12条すること・民主主義を生きる私たち」

2017年「自由を求めて」

今ある自由は、過去からたゆまず求め続けてきてくれた人たちがいたおかげ。とりわけ心の自由は今、さらに求めていかないと。この年、クッキングハウス30周年記念コンサートが開かれる。

2018年「私たちは平和のメッセンジャー」

このテーマは、前年の30周年コンサートのテーマでもあり。この年、2冊目の憲法本『たいわけんぼうBOOK+』を出す。

2019年「『私』から始まるpeopleの力」

自分は平和のひとかけら、という自覚を持つこと。「私」「私たち」の力をもっと信じよう。

2020年「地球市民として一緒に生きるために」

壮大なテーマが偶然、2020年コロナ下のおはなし会と重なる。利己と利他、前年に亡くなった中村哲さんの生き方についても。

2021年「文化と憲法」

これまたすごいテーマ。文化の語源はculture「耕す」、ということ糸口に語る。上から目線の文化と、人々の暮らしや営みから生まれる文化。クッキングハウスで実践しているさまざまな学習プログラム、オリジナルの歌づくりなど、一人一人が豊かな文化のいない手になっていること。

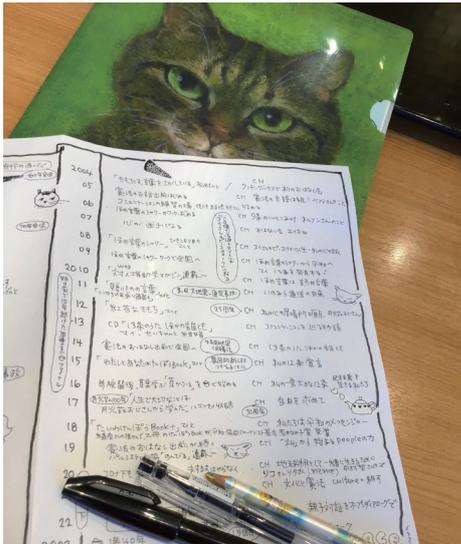
2022年 親子対話をオープンダイアログで

前年の夏、クモ膜下出血で倒れた娘のリハビリの道のりを、翌年の総会で親子対話する。退院してからクッキングハウスの講座に通うようになった娘にとって、リハビリ伴走者が松浦さんやクッキングハウスのメンバーさんたちであることもあわせて。

2023年「私のピースウォーク」

紅茶の40年だけでなく私の歩んできた道も俯瞰して。

すごろくをこうしてたどると、その年々に私が何に関心をもって動いてきたか、はっきり見えてきます。いのみら通信を毎号熟読してくれる松浦さんが、「スウさんは今ここが気になってるな」とキャッチして、リクエストのお題を私に振り、それに私が応



答する。そうやって続いてきたピースウォークのおはなし会は、松浦さんと私のコラボでもあり、社会と連動することでもあり。そもそも、心の病気があっても地域で当たり前生きていこう、というところから始まったのがクッキングハウス。その出発点からして、クッキングハウスは社会や時代と連動する場所なのでした。

ほめ言葉のシャワーから平和へ

松浦さんから毎年違うテーマのご注文をいただいて語ることに、それは自分と社会のつながりを見つめて真剣に考えることでした。クッキングハウスでスウスゴろくを語らせてもらい、そして今、語らなかったこともふくめてこうして文章にしなが、ああ、なんて貴重な機会を、私は毎年贈られ続けてきたことだろう、と改めて感じる。贈られたのは私だけじゃない、13条を発見して新解釈した娘にとっても、クッキングハウスでのその機会が、まさに贈りものだったと思います。

2009年の「ほめ言葉のシャワーから平和へ」というテーマは本当に画期的でした。その前年、ひきこもっていた娘と一緒に作った『ほめ言葉のシャワー』は、「あなたがあなたに贈りたい言葉はなんですか」という問いかけにこたえる言葉を集めた冊子。その頃の娘は、何も社会に貢献していないこんな自分がここにいていいのだろうかと感じていた。そんな自分自身に届けたくてつくった冊子だったけ

れど、その翌年、よもや「ほめ言葉のシャワーから平和へ」なんてタイトルで話すことになるとは。

でもそのお題のおかげで娘は憲法13条と巡りあえたのです。平和といったら憲法くらいしか思いつかないし……そうやって開いた憲法の13番目の条文。「すべて国民は個人として尊重される」と謳う「個人」の意味を、「私は誰ともとりかえのきかない存在なのだ」と、娘は解釈しました。それは、戦前、いのちが「とりかえのきく部品」みたいだったことと、真逆の価値観です。

——13条は、私が私らしく生きることを許し、認めてくれている。だけどそれだけじゃない、過去の深い反省に立って、個を持った一人として生きよ、と私に求めてもいる。誰もがまわりに流されるだけなら、国がまちがった方向に暴走した時、誰にもそれを止められないのだから。

娘がクッキングハウスでそう語った13条の発見と解釈に、私は目を開かされる思いがしました。以前から憲法のお話出前をしていたけど、この時から私の憲法の語り方が確実にかわった。9条を中心に語っていたのが、以後は、13条からはじまって9条へとつながる話になりました。憲法は私のことだよ、あなたのことだよ、と感じてもらえる話、そのためにもっと平らに話したい、私自身、流されずに生きたい、個の人であり続けたい、そう願いながら語るようになっていったのです。

けんぼうぶつくを書く

その延長線上に、2015年と18年に出した2冊の憲法の本があります。

娘は当初、専門家じゃないのに憲法の本を書くなんて無理だよ、と反対。だけど私は出前の行く先々で、憲法のコアである13条も、憲法を守る義務を負っているのが私たち国民でなくて国家権力の側であること(99条)も、多くの人はまだよく知らないということを実感していました。だから、難しい専門用語でない普段着の言葉で、私なりの憲法を書くことはきっと意味のあること、そう確信して原稿を書き続けたんです。その途中からは娘も私の意図がわか

って、本づくりの編集、構成、デザインを担当してくれました。もとはといえば、私の伝えたい13条は、娘が身を持って発見し解釈してくれた13条だったのですし。

憲法と同じ年の、専門家でない私が、後年、憲法の本を書くということ。そこにも私は特別の意味を見出しました。私の父は弁護士をしていて、岸内閣の時代につくられた内閣憲法調査会の委員の一人でもあったのです。何年にも及ぶその調査会の中で、父は、9条をかえることに反対する、それは徴兵制につながりかねない、という意見を国会で述べていました。憲法をかえようという意見が多い中で、父は少数派の1人でした。

父が亡くなったずっと後にそのことを知った私が、母娘でつくる憲法の本の中に、半世紀以上前の父の言葉を記すことの意味。53歳も歳が離れている父と娘だったので、生前ゆっくりと互いの想いを語り合う機会なんてほとんどなかったけど、私の誕生から実に長い歳月を経て、親子が憲法を介して共通の符号で一致して呼応した瞬間、だと感じました。父はいつも口癖のように「のち、悟らん」と言っていた。まさにその通り。人生は、のち、悟らん、だらけです。そこが不思議で、それゆえ奥深い。

私は何でできている

誰のためでなく、私自身が子育て仲間と出逢いたくて、まったく自利のためにはじめた紅茶の時間。当時は、子育て支援という行政の言葉も子育て支援センターもなかった。母親たちが自由に集まり、仲間と出逢い、自分の胸のうちを誰に気兼ねなくフラットに語りあえる場所。そういう場を求めていたのは、きっと私だけじゃなかった。ほかの多くの人にも求められていたのだと思います。

初期の大入り満員にぎわった時代を経て、仲間たちと色々な勉強会や活動もしてきて、住まいも金沢から隣町に移し、今は、退職後の夫と2人でただ静かにひらいている、という場になっていった紅茶の時間。その年月は同時に、私のアンテナがキャッチする「いいな、すてきだ、おもしろいな」に加えて、

社会で起きている「これ、へんだ、おかしい」も見つけては言葉にし、本にしてきた時間とも重なりあります。

60年安保の時は子どもすぎて、70年安保の時は関心もって良さそうな年齢なのにまったくノンポリだった私。娘を産んで、紅茶をはじめて、子育て仲間や私より先に社会とつながっている人たちと出逢っていく中で、ああ、この私も今の社会を構成している小さいけど確かなひとかけらだ、と自覚して変化していった、私にとって紅茶の40年はそういう年月でもありました。

ひとは、自分で自分のことはなかなか見えない。他者との出逢いが合わせ鏡になって、自分がどういう人間か見えてくる。若い時の私は、ごく狭い人間関係の中で生きていて、自分ってものがほんとは見えてなかったと思います。

娘が生まれて、紅茶をはじめたことで、自分の好き・嫌いで選ぶこと（って、そもそもなんて傲慢）ができない、実に多様な人たち、自分とは違う人たちと、次々出逢っていくことになった。そのおかげで、私は私のことが前よりは見えるようになった気がします。

そうやって出逢ってきたすべての人、もの、こと、できている私が、今のこういう私と出逢っている。その私は同時に、ちいさな平和のひとかけらでもあるのです。その思いから、スウすごろくの最後の言葉は、“I am a part of all I have met. I am a piece of peace.” としました。

この二つの言葉は、クッキングハウスで大事にしている、自分を主語にして語る「私メッセージ」ともぴったり重なっていて、その発見も私にはうれしいことでした。

クッキングハウスで語るためにつくったスウすごろくを何度も見返しながら、うん、私ってやっぱり相当おもしろい。15歳の時もだし、その途中もだし、そして今だにおもしろい、あらためてそれを再確認しているところです。

2023/8/23